

# Gabriel-Popescu の定理

@paper3510mm\*

2021 年 2 月 15 日

## 概要

任意の Grothendieck 圏は、ある加群圏の“良い”部分圏として実現できることが知られている。すなわち任意の Grothendieck 圏は、加群圏の反映的充満部分圏 (包含関手が左随伴を持つ部分圏) であって、さらに包含関手の左随伴が完全関手となるような部分圏になる (Gabriel-Popescu の定理)。本稿ではこの定理を証明する。

## 目次

1	準備	1
2	Gabriel-Popescu の定理	3

## 1 準備

環は積について結合的で単位元をもつとし、可換とは限らない。また圏はすべて locally small とする。

**定義 1.1.** 圏  $\mathcal{I}$  がフィルター圏 (filtered category) であるとは、

- (i)  $\mathcal{I} \neq \emptyset$
- (ii) 任意の対象  $i, j \in \mathcal{I}$  に対して、ある対象  $k \in \mathcal{I}$  と射  $i \rightarrow k, j \rightarrow k$  が存在する
- (iii) 任意の射  $f, g: i \rightarrow j$  に対して、 $h \circ f = h \circ g$  となる射  $h: j \rightarrow k$  が存在する

をみたすときをいう。

関手  $F: \mathcal{I} \rightarrow \mathcal{C}$  に対して  $\mathcal{I}$  が small なフィルター圏であるとき、 $F$  を filtered diagram,  $F$  の余極限を filtered colimit と呼ぶ。

順序集合 (poset) を圏とみなしたとき、フィルター圏の条件 (iii) は明らかであるから、filtered poset とは有向集合のことである。

---

\* <https://paper3510mm.github.io/notes>.

**例 1.2.** 環  $R$  に対し, 右  $R$ -加群のなすアーベル圏を  $\text{Mod}(R)$  とする. フィルター圏  $\mathcal{I}$  からの関手  $M: \mathcal{I} \rightarrow \text{Mod}(R)$  があるとき,  $\bigoplus_{i \in \mathcal{I}} M_i$  上の同値関係  $\sim$  を,  $x \in M_i, y \in M_j$  に対し

$$x \sim y \iff k \in \mathcal{I} \text{ と } \mu: i \rightarrow k \text{ と } \nu: j \rightarrow k \text{ が存在して } M(\mu)(x) = M(\nu)(y)$$

によって定めると,

$$\varinjlim_i M_i = \bigoplus_{i \in \mathcal{I}} M_i / \sim$$

が  $M$  の filtered colimit になる.

**注意 1.3.** 余積をもつ圏において, 任意の余積は有限余積の filtered colimit で表せる [Mac98, Ch. IX, §1, Theorem 1].

**定義 1.4.** 圏  $\mathcal{A}$  の対象  $G$  が生成子 (generator) であるとは, 関手  $\mathcal{A}(G, -): \mathcal{A} \rightarrow \text{Set}$  が忠実であるときをいう.

**命題 1.5.** 余完備なアーベル圏  $\mathcal{A}$  において, 次は同値である.

- (i)  $G \in \mathcal{A}$  は generator である.
- (ii) 任意の  $X \in \mathcal{A}$  に対して, ある集合  $I$  とエピ射  $G^{\oplus I} \rightarrow X$  が存在する.

*Proof.* (i)  $\Rightarrow$  (ii):  $X, Y \in \mathcal{A}$  に対して, 合成

$$\mathcal{A}(X, Y) \xrightarrow{\mathcal{A}(G, -)} \text{Hom}(\mathcal{A}(G, X), \mathcal{A}(G, Y)) \xrightarrow{\cong} \mathcal{A}(G^{\oplus \mathcal{A}(G, X)}, Y)$$

を  $F_{XY}$  とおく. 特に  $X \in \mathcal{A}$  に対して,  $\text{id}_X \in \mathcal{A}(X, X)$  の像を

$$\text{ev}_X = F_{XX}(\text{id}_X): G^{\oplus \mathcal{A}(G, X)} \rightarrow X$$

とおく. このとき任意の  $Y \in \mathcal{A}$  に対して,  $\mathcal{A}$  での完全列

$$G^{\oplus \mathcal{A}(G, X)} \xrightarrow{\text{ev}_X} X \rightarrow \text{Cok}(\text{ev}_X) \rightarrow 0$$

から  $\text{Mod}(R)$  での完全列

$$0 \rightarrow \mathcal{A}(\text{Cok}(\text{ev}_X), Y) \rightarrow \mathcal{A}(X, Y) \xrightarrow{- \circ \text{ev}_X} \mathcal{A}(G^{\oplus \mathcal{A}(G, X)}, Y)$$

が得られる. ここで  $F_{XY} = - \circ \text{ev}_X$  に注意すれば,  $G$  が generator であることから  $- \circ \text{ev}_X$  は単射で,  $\mathcal{A}(\text{Cok}(\text{ev}_X), Y) = 0$  となる. よって米田の補題より,  $\text{Cok}(\text{ev}_X) = 0$  となり,  $\text{ev}_X$  は epi 射である.

(ii)  $\Rightarrow$  (i):  $f, g: X \rightarrow Y$  に対し,  $f \circ - = g \circ -: \mathcal{A}(G, X) \rightarrow \mathcal{A}(G, Y)$  とする. 集合  $I$  と epi 射  $G^{\oplus I} \rightarrow X$  をとると, 各  $i \in I$  で

$$G \xrightarrow{\iota_i} G^{\oplus I} \longrightarrow X \xrightarrow[f]{f} Y$$

は一致し, coproduct の普遍性から

$$G^{\oplus I} \longrightarrow X \begin{array}{c} \xrightarrow{f} \\ \xrightarrow{g} \end{array} Y$$

も一致する.  $G^{\oplus I} \rightarrow X$  は epi 射だから,  $f = g$  となり, したがって  $\mathcal{A}(G, -)$  は faithful である.  $\square$

**命題 1.6.** アーベル圏  $\mathcal{A}$  において  $G \in \mathcal{A}$  が generator であるとき, 関手  $\mathcal{A}(G, -): \mathcal{A} \rightarrow \text{Set}$  は conservative, すなわち同型射を反射する.

*Proof.*  $\mathcal{A}$  の射  $h: A \rightarrow B$  に対して,  $\mathcal{A}(G, h)$  が同型射であるとする. 特に  $\mathcal{A}(G, h)$  はモノ射かつエピ射である.  $h \circ x = h \circ y$  なる射  $x, y: X \rightarrow A$  をとるとき,  $\mathcal{A}(G, h) \circ \mathcal{A}(G, x) = \mathcal{A}(G, h) \circ \mathcal{A}(G, y)$  が成り立つが,  $\mathcal{A}(G, h)$  がモノ射であることから  $\mathcal{A}(G, x) = \mathcal{A}(G, y)$  となる.  $G$  が generator で  $\mathcal{A}(G, -)$  は忠実であるから,  $x = y$  となる. よって  $h$  はモノ射である. 同様にして  $h$  がエピ射であることもわかる. したがって  $h$  は同型射である.  $\square$

**注意 1.7.** 実は命題 1.6 は逆も成り立つ. generator についての詳細は [KS05] や [ペ 20] を参照のこと.

## 2 Gabriel-Popescu の定理

Gabriel-Popescu の定理 (定理 2.8) を証明する.

**定義 2.1.** アーベル圏  $\mathcal{A}$  が Grothendieck 圏であるとは,

- (i) すべての余積が存在する
- (ii) filtered colimit をとる関手が完全である
- (iii) generator を持つ

をみたすときをいう.

アーベル圏は coequalizer をもつから, 条件 (i) より Grothendieck 圏は余完備である.

**例 2.2.** 環  $R$  に対して, 右  $R$ -加群のなすアーベル圏  $\text{Mod}(R)$  は Grothendieck 圏である.

**例 2.3.** スキーム  $X$  に対して,  $X$  上の準連接層のなすアーベル圏  $\text{Qcoh}(X)$  は Grothendieck 圏である [SP, Tag 077K].

**命題 2.4.**  $\mathcal{A}$  を余完備なアーベル圏とし, generator  $G \in \mathcal{A}$  を持つとする.  $R := \mathcal{A}(G, G)$  とおくと, これは射の合成によって環となる. このとき,  $\mathcal{A}(G, -)$  は関手  $T: \mathcal{A} \rightarrow \text{Mod}(R)$  を定め, さらに左随伴  $S: \text{Mod}(R) \rightarrow \mathcal{A}$  をもつ.

*Proof.*  $A \in \mathcal{A}$  に対して, アーベル群  $\mathcal{A}(G, A)$  は合成により右からの  $R = \mathcal{A}(G, G)$  の作用が定まる. よって  $\mathcal{A}(G, -)$  は関手  $T: \mathcal{A} \rightarrow \text{Mod}(R)$  を定める. 以降  $T = \mathcal{A}(G, -)$  とかく.

$M \in \text{Mod}(R)$  に対して,  $S(M) \in \mathcal{A}$  を

- $M = R$  のとき,  $S(R) = G$  とする.
- $M = R^{\oplus I}$  のとき,  $S(R^{\oplus I}) = G^{\oplus I}$  とする.
- 一般の  $M$  のとき, free resolution

$$R^{\oplus J} \longrightarrow R^{\oplus I} \longrightarrow M \longrightarrow 0$$

を取って  $S(M) = \text{Cok}(G^{\oplus J} \rightarrow G^{\oplus I})$  とする:

$$G^{\oplus J} \longrightarrow G^{\oplus I} \longrightarrow S(M) \longrightarrow 0.$$

によって定めると, これは resolution の取り方に依らない.  $A \in \mathcal{A}$  に対し, 完全列

$$0 \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}}(S(M), A) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}}(G^{\oplus I}, A) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{A}}(G^{\oplus J}, A)$$

を考えると,  $\text{Hom}_{\mathcal{A}}(G^{\oplus I}, A) \cong \prod_I T(A) \cong \prod_I \text{Hom}_R(R, T(A)) \cong \text{Hom}_R(R^{\oplus I}, T(A))$  であるから,

$$0 \longrightarrow \text{Hom}_R(M, T(A)) \longrightarrow \text{Hom}_R(R^{\oplus I}, T(A)) \longrightarrow \text{Hom}_R(R^{\oplus J}, T(A))$$

と完全列として同型となり, 自然な同型

$$\text{Hom}_{\mathcal{A}}(S(M), A) \cong \text{Hom}_R(M, T(A))$$

が存在する. よって  $S$  は  $T$  の左随伴となる. □

**注意 2.5.** 命題 2.4 の随伴は, いわゆる “普遍随伴” の例である: 環  $R$  を,  $G \in \mathcal{A}$  を対象に持つ  $\mathcal{A}$  の部分圏と同一視すれば,  $F: R \hookrightarrow \mathcal{A}$  を包含関手として  $S = \text{Lan}_y F$ ,  $T = \text{Lan}_F y$  である. 普遍随伴については [alg-d] の「Kan 拡張」ないし「豊穡圏」の pdf を参照のこと.

**補題 2.6.**  $\mathcal{A}$  を Grothendieck 圏,  $\{L_i\}_{i \in \mathcal{I}}$  を  $\mathcal{A}$  での filtered diagram とし,  $L = \varinjlim_i L_i$  とおく. 射  $K \rightarrow L$  に対して, 各  $i \in \mathcal{I}$  について pullback 図式

$$\begin{array}{ccc} K_i & \longrightarrow & L_i \\ \downarrow & \lrcorner & \downarrow \\ K & \longrightarrow & L \end{array}$$

を考える. ただし右辺  $L_i \rightarrow L$  は余極限に付随する標準的な射である. このとき, 同型

$$K \cong \varinjlim_i K_i = \varinjlim_i (K \times_L L_i)$$

が成り立つ.

*Proof.*  $\mathcal{A}$  は Grothendieck 圏だから, filtered colimit をとる関手  $\varinjlim_i$  は完全関手であり, 特に有限極限を保つ. したがって上の pullback 図式の filtered colimit をとって, pullback 図式

$$\begin{array}{ccc} \varinjlim_i K_i & \longrightarrow & \varinjlim_i L_i \\ \downarrow & \lrcorner & \downarrow \\ K & \longrightarrow & L \end{array}$$

が得られる. ここで右辺の射  $\varinjlim_i L_i \rightarrow L$  は同型であるから,  $\varinjlim_i K_i \cong K$  が成り立つ.  $\square$

証明の鍵となるのは次の命題である.

**命題 2.7.**  $\mathcal{A}$  を Grothendieck 圏とし,  $G \in \mathcal{A}$  を generator とする.  $R = \mathcal{A}(G, G)$  とおき,  $T = \mathcal{A}(G, -): \mathcal{A} \rightarrow \text{Mod}(R)$  を考えると, 命題 2.4 より  $T$  は左随伴  $S: \text{Mod}(R) \rightarrow \mathcal{A}$  を持つ. 随伴  $S \dashv T$  の同型

$$\text{Hom}_{\mathcal{A}}(SM, A) \cong \text{Hom}_R(M, TA) \quad (*)$$

のもとで  $i: M \rightarrow TA$  が  $f: SM \rightarrow A$  に対応するとき,  $i$  がモノ射ならば  $f$  もモノ射になる.

*Proof.* 二つのステップに分ける.

(Step 1):  $R$  の有限直和から  $M$  への準同型  $t: R^{\oplus n} \rightarrow M$  があるとする.  $\tau = S(t): G^{\oplus n} = S(R^{\oplus n}) \rightarrow SM$  と置くと, 随伴  $S \dashv T$  において

$$\begin{array}{ccc} G^{\oplus n} & \xrightarrow{\tau} & SM \\ & \searrow f \circ \tau & \downarrow f \\ & & A \end{array} \quad \overset{\text{adj.}}{\rightsquigarrow} \quad \begin{array}{ccc} R^{\oplus n} & \xrightarrow{t} & M \\ & \searrow i \circ t & \downarrow i \\ & & TA \end{array}$$

と図式が対応する. このとき任意の  $g: G \rightarrow G^{\oplus n}$  に対して,

$$f \circ \tau \circ g = 0 \implies \tau \circ g = 0$$

が成り立つ.

∴) 環  $R$  を一点プレ加法圏  $\mathcal{R}$  とみなすとき, そのただ一つの対象  $*$  を  $G$  にうつすような充満忠実関手  $F: \mathcal{R} \hookrightarrow \mathcal{A}$  が自然に存在する. 米田埋め込みを  $y: \mathcal{R} \rightarrow \text{Mod}(R)$  とすると, 関手  $S$  の構成から  $S \circ y \cong F$  が成り立つ. 特に

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}_R(R, R) & & \\ \uparrow y_{**} & \searrow S_{RR} & \\ \text{Hom}_{\mathcal{R}}(*, *) & \xrightarrow{F_{**}} & \text{Hom}_{\mathcal{A}}(G, G) \end{array}$$

が同型を除いて可換で,  $S_{RR}: \text{Hom}_R(R, R) \rightarrow \text{Hom}_A(G, G)$  が全単射になる. このことから

$$S: \text{Hom}_R(R, R^{\oplus n}) \cong \prod_n \text{Hom}_R(R, R) \rightarrow \prod_n \text{Hom}_A(G, G) \cong \text{Hom}_A(G, G^{\oplus n})$$

も全単射になることに注意する.

したがって  $g: G \rightarrow G^{\oplus n}$  を任意にとるとは, 対応する  $j: R \rightarrow R^{\oplus n}$  を任意にとるといふことである. 随伴  $S \dashv T$  において図式が

$$\begin{array}{ccc} G \xrightarrow{g} G^{\oplus n} \xrightarrow{\tau} SM & & R \xrightarrow{j} R^{\oplus n} \xrightarrow{t} M \\ & \searrow f\tau \downarrow f & \searrow it \downarrow i \\ & A & TA \\ & \swarrow f\tau g & \swarrow itj \\ & & \end{array} \quad \text{adj.} \quad \begin{array}{ccc} & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \\ & & \end{array}$$

と対応するとする.  $f\tau g = 0$  ならば, 随伴の同型 (\*) で対応する射  $itj$  も 0 である. すると  $itj = 0 = i \circ 0$  となり,  $i$  がモノ射であることから  $tj = 0$  となる. よって  $\tau g = S(tj) = S(0) = 0$  となる.

この事実を用いると, 図式

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \longrightarrow & \text{Ker}(\tau) & \xrightarrow{k} & G^{\oplus n} & \xrightarrow{\tau} & SM \\ & & \downarrow h & & \parallel & & \downarrow f \\ 0 & \longrightarrow & \text{Ker}(f\tau) & \xrightarrow{k'} & G^{\oplus n} & \xrightarrow{f\tau} & A \end{array}$$

において誘導される射  $h: \text{Ker}(\tau) \rightarrow \text{Ker}(f\tau)$  が同型射であることがわかる.

∴) 上の図式での可換性から  $h$  がモノ射であることはすぐにわかる. よって  $\mathcal{A}(G, h) = h \circ -: \mathcal{A}(G, \text{Ker}(\tau)) \rightarrow \mathcal{A}(G, \text{Ker}(f\tau))$  は単射である. 命題 1.6 より  $\mathcal{A}(G, -)$  は同型射を反射するから, あとは  $\mathcal{A}(G, h) = h \circ -$  が全射であることを示せばよい.

$\tilde{g} \in \mathcal{A}(G, \text{Ker}(f\tau))$  を任意にとる.  $g = k' \circ \tilde{g}$  とおくと,  $f \circ \tau \circ g = 0$  である. よって前半より  $\tau \circ g = 0$  が従う. 核の普遍性から  $g = k \circ \hat{g}$  となる  $\hat{g}: G \rightarrow \text{Ker}(\tau)$  が存在する. このとき,  $k' \circ h \circ \hat{g} = k \circ \hat{g} = g = k' \circ \tilde{g}$  となり普遍性から  $h \circ \hat{g} = \tilde{g}$  がわかる. したがって  $\mathcal{A}(G, h)$  は全射である.

$$\begin{array}{ccccccc} & & \text{Ker}(\tau) & \xrightarrow{k} & G^{\oplus n} & \xrightarrow{\tau} & SM \\ & & \downarrow h & & \parallel & & \downarrow f \\ G & \xrightarrow{\hat{g}} & \text{Ker}(f\tau) & \xrightarrow{k'} & G^{\oplus n} & \xrightarrow{f\tau} & A \\ & \searrow g & & & & & \\ & & & & & & \end{array}$$

(Step 2): 加群  $M$  に対してエピ射  $p: R^{\oplus I} \twoheadrightarrow M$  を一つ取る.  $\pi = S(p): G^{\oplus I} \rightarrow SM$  とおくと

き図式

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \longrightarrow & \text{Ker}(\pi) & \hookrightarrow & G^{\oplus I} & \xrightarrow{\pi} & SM \\ & & \downarrow & & \parallel & & \downarrow f \\ 0 & \longrightarrow & \text{Ker}(f\pi) & \hookrightarrow & G^{\oplus I} & \xrightarrow{f\pi} & A \end{array}$$

において射  $\text{Ker}(\pi) \rightarrow \text{Ker}(f\pi)$  は同型である.

∴) すべての余積は有限部分余積の filtered colimit で表せる (注意 1.3). つまり  $J$  で  $I$  の有限部分集合を表すとすると,  $R^{\oplus I} = \varinjlim_J R^{\oplus J}$  が成り立つ.  $S$  は余極限を保つから  $G^{\oplus I} = \varinjlim_J G^{\oplus J}$  も成り立つ.  $J$  成分の埋め込みを  $\iota: R^{\oplus J} \rightarrow R^{\oplus I}$  とし, pullback 図式を含む次のような図式

$$\begin{array}{ccccccc} & & \text{Ker}(\pi) \cap G^{\oplus J} & \longrightarrow & G^{\oplus J} & & \\ & & \downarrow & \lrcorner & \downarrow S(\iota) & \searrow S(p\iota) & \\ 0 & \longrightarrow & \text{Ker}(\pi) & \hookrightarrow & G^{\oplus I} & \xrightarrow{\pi} & SM \\ & & \downarrow & & \parallel & & \downarrow f \\ 0 & \longrightarrow & \text{Ker}(f\pi) & \hookrightarrow & G^{\oplus I} & \xrightarrow{f\pi} & A \end{array}$$

を考えると, 補題 2.6 により  $\text{Ker}(\pi) = \varinjlim_J \text{Ker}(\pi) \cap G^{\oplus J}$  が成り立つ. 同様に  $\text{Ker}(f\pi) = \varinjlim_J \text{Ker}(f\pi) \cap G^{\oplus J}$  も成り立つ.

ここで  $\text{Ker}(\pi) \cap G^{\oplus J} = \text{Ker}(S(p\iota))$  に注意すると, Step 1 で得た結果より

$$\text{Ker}(\pi) \cap G^{\oplus J} = \text{Ker}(S(p\iota)) \cong \text{Ker}(f\pi \circ S(\iota)) = \text{Ker}(f\pi) \cap G^{\oplus J}$$

が成り立つ. よって

$$\text{Ker}(\pi) = \varinjlim_J \text{Ker}(\pi) \cap G^{\oplus J} \cong \varinjlim_J \text{Ker}(f\pi) \cap G^{\oplus J} = \text{Ker}(f\pi)$$

となる.

さて  $S$  は右完全だから  $\pi = S(p)$  はエビ射である. よって

$$SM = \text{Im}(\pi) = G^{\oplus I} / \text{Ker}(\pi) \cong G^{\oplus I} / \text{Ker}(f\pi) = \text{Im}(f\pi)$$

であり, この同型を通じて  $f: SM \rightarrow A$  は包含  $\text{Im}(f\pi) \hookrightarrow A$  に一致する. したがって  $f$  はモノ射である.  $\square$

**定理 2.8** (Gabriel-Popescu の定理 [GaPo64]).  $\mathcal{A}$  を Grothendieck 圏とし,  $G \in \mathcal{A}$  をその generator とする.  $R := \mathcal{A}(G, G)$  とおくと, 次が成り立つ.

- (i) 関手  $T = \mathcal{A}(G, -): \mathcal{A} \rightarrow \text{Mod}(R)$  は左随伴  $S$  を持つ.
- (ii) 関手  $T$  は充満忠実である.

(iii) 関手  $S$  は完全関手である.

すなわちすべての Grothendieck 圏は、加群圏の反映的充満部分圏で、包含関手の左随伴が完全であるようなものとして実現できる.

*Proof.* (i) 命題 2.4 ですでに示した.

(ii)  $G$  は generator であるから、 $T = \mathcal{A}(G, -)$  は忠実で、随伴の counit  $\varepsilon_A: STA \rightarrow A$  はエピソードである. 一方  $\varepsilon_A$  は随伴の同型

$$\mathrm{Hom}_{\mathcal{A}}(STA, A) \cong \mathrm{Hom}_R(TA, TA)$$

で  $\mathrm{id}: TA \rightarrow TA$  に対応する射であるから、命題 2.7 より  $\varepsilon_A$  はモノ射である. よって counit  $\varepsilon_A$  が自然同型になり、右随伴  $T$  は充満忠実である.

(iii)  $S$  は右随伴を持つから右完全である. よって左完全であることを示せばよい.

まず、自由加群  $R^{\oplus I}$  の部分加群  $K \subseteq R^{\oplus I}$  に対して、 $S(K) \rightarrow S(R^{\oplus I}) = G^{\oplus I}$  がモノ射であることを示そう.  $J \subseteq I$  を有限部分集合とし、 $R^{\oplus I}$  を  $R^{\oplus J}$  たちの filtered colimit で表す.  $K$  と  $R^{\oplus J}$  の pullback を

$$\begin{array}{ccc} K_J & \longrightarrow & R^{\oplus J} \\ \downarrow & \lrcorner & \downarrow \\ K & \longrightarrow & R^{\oplus I} \end{array}$$

とする. このとき  $S(K_J) \rightarrow S(R^{\oplus J}) = G^{\oplus J}$  はモノ射  $K_J \rightarrow R^{\oplus J} = T(G^{\oplus J})$  に対応する射だから、命題 2.7 よりモノ射である. 今  $\varinjlim_J$  は完全関手だから

$$\varinjlim_J S(K_J) \rightarrow \varinjlim_J S(R^{\oplus J})$$

もモノ射である.  $S$  は左随伴で、補題 2.6 より  $K = \varinjlim_J K_J$  が成り立つことから、このモノ射は  $S(K) \rightarrow S(R^{\oplus I}) = G^{\oplus I}$  と (同型を除いて) 一致する.

さて  $S$  が左完全であることを示すには、一次の左導来関手  $L_1S$  について  $L_1S = 0$  であることを示せばよい. 任意の  $M \in \mathrm{Mod}(R)$  に対し、完全列

$$0 \longrightarrow K \longrightarrow R^{\oplus I} \longrightarrow M \longrightarrow 0$$

を取ると、この完全列から長完全列

$$\cdots \longrightarrow L_1S(R^{\oplus I}) \longrightarrow L_1S(M) \longrightarrow S(K) \longrightarrow S(R^{\oplus I}) \longrightarrow S(M) \longrightarrow 0$$

が得られる. このとき、 $K \rightarrow R^{\oplus I}$  がモノ射だから  $S(K) \rightarrow S(R^{\oplus I})$  はモノ射で、したがって  $L_1S(M) = 0$  となる. 以上より  $S$  は完全であることがわかった.  $\square$



■ 系 2.9. Grothendieck 圏  $\mathcal{A}$  は、完備である。

*Proof.* 定理 2.8 で得られた随伴  $S \dashv T$  の unit を  $\eta: \text{Id} \Rightarrow TS$ , counit を  $\varepsilon: ST \Rightarrow \text{Id}$  とする。右随伴  $T$  が充満忠実だから、counit  $\varepsilon$  は自然同型であり、三角等式

$$\begin{array}{ccc} T & \xrightarrow{\eta T} & TST \\ & \searrow & \downarrow T\varepsilon \\ & & T \end{array}$$

より  $\eta T$  も自然同型である。  $\mathcal{A}$  が完備であることを示すためには、任意の小さい圏  $J$  と関手  $F: J \rightarrow \mathcal{A}$  に対して、  $F$  上の cone 全体の集合をとる関手  $\text{Cone}(-, F): \mathcal{A} \rightarrow \text{Set}$  が表現可能であることを示せばよい。

$a \in \mathcal{A}$  を任意にとる。  $\Delta: \mathcal{A} \rightarrow [J, \mathcal{A}]$  を対角関手とすると、  $\text{Cone}(a, F) = \text{Nat}(\Delta a, F)$  である。  $T$  は充満忠実であるから、

$$\text{Cone}(a, F) = \text{Nat}(\Delta a, F) \cong \text{Nat}(T(\Delta a), TF) = \text{Nat}(\Delta(Ta), TF) = \text{Cone}(Ta, TF)$$

である。  $\text{Mod}(R)$  は完備であるから  $TF: J \rightarrow \text{Mod}(R)$  は極限  $L = \varprojlim TF$  を持ち、

$$\text{Cone}(Ta, TF) \cong \text{Hom}_R(Ta, \varprojlim TF)$$

が成り立つ。

ここで、  $\eta_L: L \rightarrow TS(L)$  が同型であることが示せる：

$\because L = \varprojlim TF$  の limit cone を  $(L, \rho)$  とすると、各  $j \in J$  について  $\eta_L$  の普遍性から

$$\begin{array}{ccc} L & \xrightarrow{\eta_L} & TS(L) \\ & \searrow \rho_j & \downarrow T\pi_j \\ & & TFj \end{array}$$

を可換にする  $\mathcal{A}$  の射  $\pi_j: S(L) \rightarrow F_j$  が一意的存在する。普遍性から  $(\pi_j)_{j \in J}$  は  $F$  上の cone  $(S(L), \pi)$  をなす。このとき cone  $(TS(L), T\pi)$  を考えると、  $(L, \rho)$  が  $TF$  上の limit cone であったから、

$$\begin{array}{ccc} TS(L) & \overset{\tau}{\dashrightarrow} & L \\ & \searrow T\pi_j & \downarrow \rho_j \\ & & TFj \end{array}$$

を可換にする  $\text{Mod}(R)$  の射  $\tau$  が一意的存在する。このとき

$$\tau \circ \eta_L \circ \rho_j = T\pi_j \circ \eta_L = \rho_j = \text{id}_L \circ \rho_j$$

だから  $L = \varprojlim TF$  の普遍性より  $\tau \circ \eta_L = \text{id}_L$  が成り立つ。一方  $\eta_L \circ \tau: TS(L) \rightarrow TS(L)$

を考えると,  $T$  が full であるから,  $\eta_L \circ \tau = T(\sigma)$  となる  $\sigma: S(L) \rightarrow S(L)$  が存在するが,

$$T(\sigma) \circ \eta_L = \eta_L \circ \tau \circ \eta_L = \eta_L = T(\text{id}_{S(L)}) \circ \eta_L$$

だから unit の普遍性より  $\sigma = \text{id}_{S(L)}$ , したがって  $\eta_L \circ \tau = \text{id}_{TS(L)}$  が成り立つ. よって  $\eta_L$  は同型である.

したがって,

$$\begin{aligned} \text{Cone}(a, F) &= \text{Nat}(\Delta a, F) \cong \text{Nat}(T(\Delta a), TF) = \text{Nat}(\Delta(Ta), TF) \\ &\cong \text{Hom}_R(Ta, \varprojlim TF) \\ &\cong \text{Hom}_R(Ta, TS(\varprojlim TF)) && \text{via } \eta_L \\ &\cong \mathcal{A}(STa, S(\varprojlim TF)) && \text{via } S \dashv T \\ &\cong \mathcal{A}(a, S(\varprojlim TF)) && \text{via } \varepsilon_a \end{aligned}$$

となり,  $\text{Cone}(-, F)$  が表現可能であることがわかる. □

## 参考文献

- [GaPo64] P. Gabriel and N. Popescu. *Caractérisation des catégories abéliennes avec générateurs et limites inductives exactes*, C. R. Acad. Sci. Paris 258, 4188–4191, 1964.
- [KS05] M. Kashiwara and P. Schapira. *Categories and Sheaves*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften vol. 332. Springer-Verlag, 2005.
- [Mac98] S. Mac Lane. *Categories for the Working Mathematician*, Graduate Texts in Math. 5, 2nd ed. Springer-Verlag, 1998.
- [Mur06] Daniel Murfet. *Abelian Categories*, ver. October 5, 2006.  
<http://therisingsea.org/notes/AbelianCategories.pdf>.
- [Pop73] N. Popescu. *Abelian Categories with Applications to Rings and Modules*, London Mathematical Society Monographs 3. Academic Press, 1973.
- [SP] The Stacks project authors. *The Stacks project*, –2021.  
<https://stacks.math.columbia.edu>.
- [高橋 12] 高橋篤史. 『弦理論の代数的基礎 – 環・加群・圏からの位相的弦理論, ミラー対称性へ』, 臨時別冊・数理科学 SGC ライブラリ 89. サイエンス社, 2012.
- [中岡 15] 中岡宏行. 『圏論の技法 – アーベル圏と三角圏でのホモロジー代数』. 日本評論社, 2015.
- [alg-d] alg-d. 圏論—壱大整域. [http://alg-d.com/math/kan\\_extension/](http://alg-d.com/math/kan_extension/).
- [ペ 20] ペーパー (@paper3510mm). 『圏の generator について』, ver. 2020 年 10 月 19 日.  
<https://paper3510mm.github.io/notes>.